

「前立ちからみた消化器外科手術」

東海病院院長 早川 直和 著
名古屋大学教授・第1外科 二村 雄次

北海道大学医学部第2外科

加 藤 紘 之

この度、医学書院から早川直和・二村雄次両博士の執筆による「前立ちからみた消化器外科手術」が刊行されました。筆者は、初めてこの書を手にして、頁をめくるうちに、大きな感動を覚えました。従来の成書には全くなかった、助手側から見た術野の展開や助手の役割、なすべきことが実に詳細に書かれているからであります。ほぼ全頁にわたり、正確な局所解剖と、術者の手、鉗子やはさみなどを具体的に表示して、手術の進め方が記載されています。

二村博士は、卒後3年目には既に故梶谷先生(癌研)の教えを請うて、その門を叩き、強烈なカルチャーショックを受けたこと、また手術はチームプレーであるもので、いくら術者が達人であっても助手の協力がなければ技を発揮することはできないといったことを教えられ、自分自身体験してみて、これが手術の基本であることを悟ったと述べています。

また、早川博士は、二村博士の長い間の同僚として、全く同じ考えに基づき、外科手術の基本原則を、情熱を込めて、この書に書き表しています。各頁には、必ず明解な図が

ついていて、しかもその局所解剖は実に正確に表現されています。前立ちの手の位置、組織の引き具合、術者の手の位置などが的確に記載されていますので、この図のような術野展開になれば、間違いのない手術が行われているとの確信を持たせてくれます。文中に見られるコーヒープレイク、あるいはワンポイントの欄は、誠に要を得て、言葉では表しにくいところ、ピットフォールや手術のコツといったところを上手に述べています。特に、電気メスの使い方のコツについては、著者の多年の経験から得られた、他書のどこにも書かれていないポイントが表現されており、筆者にも大いに役立ちました。お得意の肝門部胆管癌の手術や尾状葉切除については、脈管のバリエーションを考慮しつつ、必要最小限度の肝切除にとどめ、機能温存と根治性の追求、および手術の安全性について、深い配慮に満ちた書き方が随所になされており、いわば究極の手術と言っても過言ではないと思われます。更に、チームプレーの重要性を説く中で、手術中の交代についても、全精力をつぎ込んだ長時間にわ

たる手術であれば、切除組と再建組を分け、それ相当の力量を持ったチームを日頃から育成しておくことの重要性も強調されています。

手術、特に癌手術は、機能温存と術後のQOLに配慮しつつ、根治性をいかに求めるかが重要であることは論を待ちません。それには局所解剖を十分に把握して、チームプレーの中で、手術の目的をしっかりと遂行するということがすべてであります。本書に記載されている消化器外科手術のポイントやコツといったものは、この点において、わが国の外科医すべてに大きな示唆を与えてくれます。手術場から直接学ぶことができないことをこの1冊の書から学ぶことは、われわれ外科医にとって大変幸せなことであり、何度も読み返す価値のある良書であります。中堅外科医はもとより、もっと経験の深い外科医にとっても、是非一読をお薦めしたい良書であります。

●B5 頁352 図218 1995 定価
8,240円(税込) 7400